

生涯学習都市掛川における まちづくりと報徳

前 田 寿 紀
(淑徳大学)

はじめに

現在、多くの市町村が生涯学習都市宣言をするようになった。わが国の生涯学習都市形成にあたっては、P. ラングラン、ハッチンス、OECD等のいわゆる生涯教育・学習論の古典が参考になることは言うまでもない。しかし、これら諸外国の理論をそのままわが国の生涯教育・学習実践に取り入れることは困難であるように思われる。わが国には生涯教育・学習論が唱えられる以前から、日本古来の思想・知恵を活用し生涯にわたる教育・学習活動により地域を形成してきた例は数多い。その一例として、生涯学習都市宣言（昭和54年4月1日）第1号の掛川市（およびその周辺も含む遠州地方）は、特に明治時代以降の報徳社運動の中心地（報徳社の本社である「大日本報徳社」〈前身は「遠江国報徳社」〉。以下、大報と略称）所在地。この支社多数存在）である。また、「遠江国報徳社」・大報社長で明治・大正期の報徳社運動の強力な指導者であった岡田良一郎の所在地でもある。そこでは、現在も大報とその支社が二宮尊徳の思想（報徳思想）・知恵を活用して地域づくりを進めている。

生涯学習都市掛川（以下、生掛と略称）に関しては、一般的には「第三次全国総合開発計画」（昭和52年11月閣議決定）の影響によるいわゆる“地方の時代”の一動向として捉えられている。しかし、この捉え方はいわば下から起こった報徳社の活動の土壌を活かしている側面を捉えていない。次に、鐘ヶ江晴彦「掛川市の生涯学習都市計画」¹⁾は、「市長個人の強烈的な個性と独創的なアイデア」による「かなり思いつきの統一性が十分にとれて」いないものとする。しかし、過去の報徳社の一次資料と照らし合わせると、アイデアには報徳社の方法論に似た方法がある。次に、「現代のユートピアをめざす」²⁾という類の過大評価もある。なお近年、本間義人「掛川『土地条例』の意義 ■革新性と保守性両立の柔軟さに特徴」³⁾、佐藤進『日本の自治文化 日本人と地方自治』⁴⁾、五十嵐敬喜

・小川明雄著『都市計画 利権の構図を超えて』⁵⁾ 等が「掛川市生涯学習まちづくり土地条例」(平成3年3月27日掛川市条例第9号、4月1日公布)を紹介している。また、『掛川市史 下巻』⁶⁾、国立教育会館社会教育研修所編『生涯学習の構想と実践〈生涯学習宣言市町村の活動事例集〉』⁷⁾ が生涯学習のまちづくりを概説している。しかし、全体として生掛の大きな特色である報徳社の活動の土壌を活かしている側面を明らかにした研究はない。

一方、報徳社運動に関しては、戦後の政治思想史、経済学、教育史等により、国民支配の運動、日露戦争後の財政難等の国家的問題処理の運動等として、一面的かつ早急に性格づけられてきた。しかし、報徳社運動には政治的行為や資本蓄積の手段という意味以上に、人々の生涯にわたる学習活動という意味がある。

そこで、筆者は生掛が報徳社の活動の土壌をどのように活用してまちづくりを推進しているのかを、主導力の強い掛川市長榛村純一氏と社会教育を推進する同市教育委員会教育長大西珠枝氏(前文部事務官)への聞き取り調査(平成7年4月10日〈月〉)の結果と、掛川市役所の資料、市長の著作物、報徳思想・報徳社運動に関する史資料を使用して明らかにすることにした。その際、生掛が単なる都市経営だけでなく人々の内面にまで踏み込み道徳心の育成等も考えているという観点から、荒地の開拓と「心田」の開拓を両立した報徳社の活動との関係に着目する。報徳社は、荒地の開拓として、「報徳金」積み立て、田畑・茶畑整理、道路開鑿、治山・治水・利水、溜池づくり、農業上の知識・技術の習得・活用、植林・緑化等をしてきている。「心田」の開拓とは、心を田(や畑)に見立てて開発することで多分に教育的意味がある⁸⁾。報徳社の人々は、これとして「常会」「報徳婦人会」「報徳家庭会」へ参加し報徳社社長・「報徳学訓導」等の講演を聴取したり、入札による表彰へ参加したり、平素、報徳の実践倫理「勤労」「分度」「推譲」の実践、報徳書・報徳社機関誌等の講読、定款・細則等の遵守、胎教以前の教育の実践等を行ったりする。報徳社は、荒地の開拓と「心田」の開拓を両立させて両者の間に良い相互作用を起こさせ、次代のまちづくりを指導する報徳人を輩出するという方法論をもっている。

I. 掛川市長榛村純一と報徳

市長は、宣言の「源流は大日本報徳社があること」⁹⁾、市政は「報徳ルネサンス運動の始まり」¹⁰⁾、「報徳は、まさしく生涯学習運動」¹¹⁾、生涯学習運動に「報徳思想を是非生かしたい」¹²⁾等と述べる。このように、市政推進やまちづくりにあたり彼は報徳社の活動の土壌へ大きな期待をかけている。

ここで市長の経歴をみている。彼は、昭和9年掛川市上垂木の15代目林家に生

まれた。現在も近くに「坂下報徳社」（明治33年3月「遠江国報徳社」から設立認可）がある。「木を植ゆるは徳を植ゆるなり」と述べた金原明善（報徳信奉者。報徳研究者留岡幸助、良一郎等と交友あり）を立派だとししばしば語る母、良一郎とその息子一木喜徳郎と交際のあった父（三代目掛川市長榛村専一。裁判所判事、愛知大学法経学部教授、北小笠村長等歴任。著作権法研究者）の影響を受け、家の一木の書“一其徳”を見て育った（市長談）。また、報徳精神がしみ込み造られた多数の溜池に囲まれて育った（同上）。昭和38年に掛川市森林組合長（現在に至る）、同43年に静岡県森林組合連合会専務理事（現会長）となる。同52年に掛川市長に初当選し現在に至る。市長就任の所信表明演説では「報徳ルネサンス」（再興）を述べた。同53年2月から大報顧問となった。同54年に掛川市生涯学習都市宣言（以下、宣言と略称）を出した。同56年秋に大報内「報徳賛助会」代表となり、同59年にメンバーとして青少年用普及版『ほうとく 二宮金次郎』の出版に尽力した。同62年4月から大報内「報徳大学校」学長を勤めている。同63年5月23日に尊徳緑の地の6自治体市町村が集合して開催（於「小田原市尊徳記念館」）された「尊徳サミット」で、“町づくりの三か条”「一 まちおこしの先達である翁に学び、未来に向けて活力と魅力あふれるまちづくりをすすめます。／二 翁の唱えた報徳の精神に学び健やかで思いやりの心に富んだ人を育む環境づくりに努めます。／三 翁の一円融合の精神に学び、東西南北の地域の人々と心のふれあう友好の輪を広げるよう努めます。」を作成した¹³⁾。平成3年4月から「報徳運動を育てる会」（元「報徳賛助会」）代表となった。以上のように、彼と報徳とは密接な関係にある。その他、静岡県社会教育委員、(株)静岡県山林協会会長、国土政策懇談会委員、文部省「生涯学習施設ネットワーク形成委員会」委員・「文教施設のインテリジェント化に関する調査研究協力者会議」協力者・「生涯学習クリエイティブアドバイザー」を務めている。

Ⅱ. 市長をはじめとする人々の問題意識

彼は、著書等で掛川市を次のように分析する。自主財源乏しく水不足気味、静岡と浜松にどっちつかずの田舎で、林業も衰退している。（「つま恋」等があり）レクリエーション都市でもあるが、パンチに乏しい。（かつて東海道53次「掛川宿」として栄えたが）インター・駅なしの通過性をもつ。企業は零細で報徳思想がマイナスに作用したとも考えられる¹⁴⁾。以上のマイナス面と関連し、市政を嫌う、ローカルプライド消失等の現象が出ている。定住意思の希薄化や消極性も招いている。過疎化と優秀な人の流出も起きている。

しかし、市長は遠州地方の報徳社運動が過去にマイナスをプラスにしてきた

（“荒地は荒地の力を以て開” いてきた）実績を意識して次のように言う。安政の大地震で被害を受けたが水がなかった。溜池も多く地形も悪かった。宿場として栄えた時期はあったが、明治以降静岡と浜松の間に置いてきぼりになった。貧しかったから報徳が入り、ケチ・消極的になるのではなく力を出し「推譲」してマイナス面をプラス面に転換してきた。尊徳の言う徳とは、「そのものの持てる美点、長所」である。報徳とは、「徳を引き出し活用すること」である¹⁵⁾。人々の徳を引き出し活用すれば必ずまちづくりはできる。江戸時代に生まれ、教えが今も実践運動として続いているのは報徳だけで、尊徳は人の身代管理や処世術をもち、人を育てる方法をもっている¹⁶⁾ し、尊徳の学問は、農業経営や土木技術の経験と村おこしや財政再建の指導実践から築きあげられた「日本思想史上の独立峰」なのである¹⁷⁾。

市長は、市長就任の昭和52年当時の市の状況は市民全てが何となく停滞しているから流れを変えるには思い切った発想の転換が必要と考え、掛川学の提唱・定住圏の指定・新幹線掛川駅設置の“三大ロマン”を提唱した。周囲は、夢のような話で「気がおかしいのではないか」と言った。市長は、ここで「まちの繁盛・活性化は、お互いに徳を引き出し合えば必ずできる」（市長談）と考え、「報徳の徳すなわち勤儉・分度・推譲という徳」¹⁸⁾を活用することに向け宣言に至った。宣言後も、「金次郎の生涯はすさまじい志をもった一生で」「その教えを継いだ遠州報徳社の岡田佐平治、良一郎親子の村づくり、人づくり運動も、激しい向上意欲をもった教育運動」とし、「明治の生涯教育運動であった報徳運動の火が消えそうでは、何のための生涯学習かといわれてもしかたがない」と考え奮起している¹⁹⁾。

Ⅲ. 掛川市におけるまちづくりの実態

1. 経過と「生涯学習都市宣言」と「生涯学習都市宣言のテーマとプロジェクト（第5案）」

まず、掛川市におけるまちづくりの経過は以下のようになっている。①昭和52.9.18 市長就任、1年間に市民対話集会約200回。②同52.12 新幹線掛川駅設置構想を市議会に発表。③同53.2.24 掛川市事始集会（市民総代会の前身）。生涯学習運動の提唱。④同53.4.7 モデル定住圏の指定。⑤同53.4.15 市民レポート第1号の発行。情報公開と問題提起。⑥同54.4.1 生涯学習都市宣言。市制25周年記念。国土庁からの助役。⑦同55.4.1 生涯学習18項目10か年3,000億円プランスタート。⑧同58.4.1 「生涯学習センター」オープン。⑨同58.11 駅前通り線が「うるおいのあるまちづくり第1回自治大臣賞」受賞。⑩同63.3.13 新幹線

掛川駅開業。⑪平成2.4.1 生涯学習10か年計画パートⅡ 5,000億円プランスタート。⑫同3.6.1 「掛川市生涯学習まちづくり土地条例」施行。⑬同4 「徳育保健センター」落成。⑭同5.12.21 東名掛川インターチェンジ供用開始。⑮同6.4.3 本格木造復元「掛川城天守閣」開門。

掛川市は、昭和54年4月1日議会宣言により宣言を行った。要約宣言文は、

「掛川市生涯学習都市宣言

掛川市民は

少しでも多く幸せを実感するために

健康で生き甲斐をもって生きていくために

お互いは何をなすべきかと

いつも問いかけ合いながら、一生涯学びつづけていこう

市制25周年記念に当り

掛川市を『生涯学習都市』とすることを宣言する

昭和54年4月1日

掛 川 市」

である。全文はⅠ～Ⅳまでである。市長が全文のうち特に気をつけたくだりは、「健康で生き甲斐をもって生きていくために、／一人でも多く素直になり、悟りを開けるようになるために」の生涯学習の目的部分と、「掛川市は／ありきたりの田園都市ではなくて／思想性の高い田園都市となるために」の目標部分である²⁰⁾。行政用語に馴染まないと言われた「趣味道楽」「思想性の高い」は敢えて入れた²¹⁾。宣言を出す前に作られた「生涯学習都市宣言のテーマとプロジェクト（第5案）」（全18項目）のうち報徳に関係しているのは、「1 掛川（わが地域）をよく認識し、良質の情報『これっ』というものを磨き上げる一〇年／…報徳社、つま恋、溜池谷田文化、さやの中山など（掛川学事始）。／（以下、略）」「8 商工業の安定路線、省エネルギーの生活哲学（報徳）を確立する一〇年／商売・経営を通じてしっかりした人間をつくる。……省資源の職業倫理。」「10 川・池・水と人間の関係で流域単位にものを見直す一〇年／治山・治水・利水（水資源確保・上水・農水）・下水。／（以下、略）」である。すなわち、まず良質の情報「掛川学」作成（「掛川学」を作るのは地域をよく知ること、このことは報徳社運動の基本論である〈市長談〉）にあたり、報徳社そのものや、報徳社が力を注いで築いてきた「溜池谷田文化」に着目している。次に、省エネルギー等を追求する際、商人にも浸透した報徳思想（特に「分度」）を活用しようとしている。次に、明善・良一郎等の報徳人が報徳精神で大きな功績を残してきた本地域の治水等を意識している。

144 研究ノート

2. 「地球・美感・徳育都市宣言」

生涯学習都市宣言発布10年を記念して、

『地球・美感・徳育』都市宣言

1. 地球・森林都市（全市生涯学習公園化計画をすすめる）

掛川市民は、いつも地球環境や平和のことを考え、森と水を大切に思い、わがまち全体を清らかな公園のようにつくり上げていこう。

2. 美感・活力都市（全社生涯学習活性化計画をすすめる）

全ての法人と団体は、美しい心、美しい都市、美しい人をモットーに、知識・情報集積に務め、信頼の人間関係をしなやかに活性化させていこう。

3. 徳育・安心都市（全戸生涯学習安心化計画をすすめる）

全ての家族は、食育（食事の教育）・撫育（愛撫する教育）という徳育に務め、いつも福祉の心をもって、健康な家庭と安心な地域社会を築いていこう。

1990年4月1日

掛 川 市

も宣言した。市長は「掛川は、お互い、徳を引き出し合うなかで、地球森林・美感活力・徳育安心都市をめざしている。」²²⁾と述べ、この宣言と報徳との関係を明言している。

3. まちづくりの状況－報徳との関わり－

(1) 資金・制度・環境面の活動－荒地の開拓との関わり－

① 行 政

「財政再建・農村復興の為に、村にどれ程の生産力があるかよく調査し仕法を行い、生産力があがったらお百姓さんへ還付するのとたまに一致した」（市長談）が、市でも、借金財政を見定め、区画整理・街路事業・土地条例による土地利用、芸術性ある公園的商店街作成を図っている。例えば、駅南北を始めとする区画整理事業、大規模工業団地（エコポリス）の建設、企業誘致等を行っている。また、土地条例文のように「地価の上昇があった場合においては、報徳推譲の精神に基づき、その利益を市民全体に還元し社会的公正の確保に資」している²³⁾。

また、生産量日本一のお茶（報徳社・報徳人が茶業を発展させてきた功績大）を始め、伝統産業の葛布製品、いちご・バラ等の産業育成にも力を注ぐ。

また、森林づくり、ゴミ・公害をなくす活動、“緑化は絶対善”²⁴⁾の考え

の下での緑化を推進（例、ムクゲと生涯学習シンボルフラワーフヨウの100万本植栽）し、「全市生涯学習公園化計画」を実現させている。市は、森林組合に1,000万円を出資し森林キャンプ場（シルバポリス）や土地条例による永久森林を設けた。また、昭和54年5月には第三十回県中央植樹祭を掛川市下垂木地内「飛鳥報徳社」有林（山林所有の報徳社多数あり）で開催し、この年を掛川市の緑化元年とした。かつて良一郎は、城趾一帯に植物教育園を作ると東西からお客が集まり掛川が賑わうとし実行したが、市長は掛川に新幹線駅を作る根拠の一つに全市域を緑化公園化し公園駅を作ることあげているのは、この良一郎の構想にヒントを得ている面が多分にあると言う²⁶⁾。なお、市長が“緑化は絶対善”とするのには「町の緑の質量が、その町の文化度、市民の成熟度をあらわす指標になっていく」²⁶⁾「人々は緑と出あい、年輪と出あい、清流と出あい、自分と出あい、生涯学習人生を深めていく」²⁷⁾という考え方がある。

市民募金も有効に活用している。市民募金30億円（一戸平均約10万円）が達成されると、総事業費135億円で新幹線掛川駅を開業し、駅周辺の“日本一掛川駅八景づくり”を進め景観に留意した。駅前には33種類・100本の街路樹を植栽し、開業記念として大報・「掛川経済懇話会」寄贈による“二宮金次郎の像”（制作者松田裕康）を建立（昭和63年3月13日）した（像には、尊徳は「向学、勤勉、貯蓄のモデルのような一生」とか像は「向学心の象徴」という市長解説が刻まれている。）。さらに、市民募金10億円により全国初の本格木造復元の「掛川城天守閣」を開門した。市長は、これら市民募金は「尊徳の推譲の精神の土壌があったのでできた」と分析する²⁸⁾。

生涯学習施設に関しては、三層に分類した「三層建て生涯学習施設」を配置しネットワーク化を図っている。三層は、中央施設群〈全市民が集まる場所〉である上層、学校区施設群〈学区、旧村の区民が集まる場所〉である中層、自治区施設群〈区の住民が集まる場所〉である基層から成る。新たに「生涯学習センター」（ここで、掛川市の市民大学として大報の人の講演会も開催）を設立し「上層」の中心に据えた。上層には、その他市役所、市立総合病院、教育センター・教育会館、市立図書館、総合福祉センター、大報、掛川城址等52施設を配置した。中層の中心は、地区学習センターで、主に大報の支社である地区報徳社、小学校・中学校・幼稚園も加えた。基層には、地区報徳社、神社・寺院等も加えた。なお、市長は現在閉鎖中の大報の「淡山翁記念報徳図書館」を早く活用できるようにしたいと言う²⁹⁾。

さらに、市はデータバンクを整理し、情報収集・管理にも努めている。

② 企 業

市長は「これからの社会は節制と自立が大事」で、報徳運動を見直しすべての企業の自己資本充実を十年かかって図りたいと言う³⁰⁾。また、彼は企業に対して、社会的還元・地域投資を呼びかける。この社会的還元・地域投資の呼びかけは、良一郎も日露戦争後等に行ったことである(大報文書)。

③ 市 民

市民に対しては、自己資本の充実を求める。市長は、掛川市が「とくに貯蓄性向が強い」のは「勤儉貯蓄を説いた二宮尊徳の大日本報徳社が掛川市にあるから」³¹⁾と分析し、その土壌に期待する。また、市長は尊徳に倣って、これからはわがまちと外国と森林・環境の為に貯金が必要であり、経済大国日本はこれらをあまりしなかった為、非難、破壊等を起こしていると啓発する³²⁾。

④ 婦 人

婦人は婦人会組織の充実を図る。市長は、「幸い掛川は婦人会活動の先進地ですから期待している」(市長談)と述べるが、実際に掛川では、「遠江国報徳社」が明治36年4月に「報徳婦人会」を発会して以来、「報徳婦人会」が活発に活動し地域づくりをしてきている経緯がある(大報文書)。

(2) 内面に踏み込んだ活動 - 「心田」の開拓との関わり -

一方、生掛は内面に踏み込んだ活動も推進する。市長は、理念をもった実施計画である尊徳の「仕法」には封建制下の限界はあるが、日本独特の農村合理主義が貫かれているとしたうえで、尊徳の“心の荒蕪一人開くときは地の荒蕪何万町あるも、憂うるに足らず。己の一戸を廃して万戸を起こさんとす”を引用し、市民の「心田」の開拓に着目する³³⁾。

① 行 政

市役所においては、官の弊害是正、市役所内でのリーダー集団養成に努める。

② 企 業

市長は、企業に対して社会的還元・地域投資を通して地域文化の形成を求める。また市は、「企業の教育力(雇用、税収、文化、スポンサー力)」の活用を期待し、「従業員に対する地域教育(掛川学のすすめ)、レクリエーション活動」を勧める³⁴⁾。

③ 市 民

市民は市民総代会へ参加する。中央集会は4月に140自治区三役、市三役・部長参加で、地区集会は10～11月に17会場で行う。主に、市政の広報・広聴(対意見・要望・苦情・アイデア)を行う³⁵⁾。市長は、皆が本会に素直に出席するのは、報徳社「常会」へ出て地域を学習する土壌があるからと言う(市

長談)。そして、前述市民募金は総代会システムの寄与が大きいと言う³⁶⁾。総代会への参加と市民募金による掛川駅等建設の構図は、誰でも参加可能な「常会」への参加とそこでの報徳金積み立て・地域への還元の構図を思い起こさせる。

市民は、「生涯学習シンポジウム」にも参加（昭和54年以降）する。テーマは、第1回（昭和54年）「自然と都市と人間のあり方を求めて」、第3回（昭和62年）「生涯学習社会への移行、その展望と戦略」、第8回（平成4年）「掛川まちづくりシンポ」等である。また、「生涯学習推進市民大会」（昭和56年から毎年開催）へも参加する。

また、平成7年4月8日から教育委員会社会教育課が開設した「とはなにか学舎」にも参加する。本学舎は、「我がまち『かけがわ』を愛する人を大勢つくるとともに、人間を磨き、グローバルな視点から、“きりり光る小都市『かけがわ』”の将来像を描き・語れる人を育てることを目的」とする（教育長談）。社会教育の従来の教養講座の他に、名所めぐり、企業・行政施設見学、リーダー養成、地域おこし塾等の機能を備えた、全国初の新しい画期的な生涯学習システムである（同上）。

さらに、「年輪のつどい」（20才〈成人式〉から始まり90才〈卒寿式〉まで、10年ごとの節目に人生を味わう為に行われる催し）にも参加する（年齢階梯に応じた式は、報徳によるむらづくりをして内務省等から「明治の三大模範村」と言われた静岡県賀茂郡稲取村でも行われていた）。各年代別の実行委員会は、企画・運営・実施を行う。内容は、記念式典・講座・アトラクション・アンケート調査である。なお、年輪とは木の年輪から取った言葉であるが、市長・木・報徳の3者は密接な関係にある。例えば市長はこう述べる。「私は、報徳の教えがしみついて育てられたので、徳育をいつも意識……。／植林に行けば、『木を植ゆるは徳を植ゆるなり』と教えられ」³⁷⁾た。「いつも山と森と昆虫に出あって暮らし……無常を感じるときもあれば、自然の奥深さや生命の切なさを思うときもある。」³⁸⁾また、彼は家にある15代前の先祖が植えた5本杉（400年生、40メートル位）と本人が最初に植えた杉・ヒノキ（25年生、15メートル平均）をさわり、絶望・落ち込みを癒している³⁹⁾。

市長によれば、徳は一生涯かけて積んでいかねばならないもので、節目節目で通過儀礼を行い、積んだ徳を確認するのがこのつどいである。「人材」の「材」は「材木」にも使用され（市長談）、「木も人間も、できるには五〇年かか」る⁴⁰⁾。木の伐採＝報徳金である⁴¹⁾。彼は自らもこのつどいに参加し、「お茶をいただきながら宇宙と生命を感じ、地域と時代の移り変わりを楽しみ、次の十年の仮決算に向かって悠々と暮らそうと話し合っている。」⁴²⁾。彼は、

「一杯のお茶を一期一会の気持ちで飲むことは、徳育の最もたるもの」⁴³⁾ と言う。ここで市長・筆者が「一杯のお茶」を報徳流に解釈すれば、先祖あって今ある、年輪を重ねた一本の茶の木に、天地のあり余る恵みと人の「勤労」等のあらゆる徳が加わることによってできた茶に感謝し、茶を飲むことにより生命を維持できたり、おいしさを感じたり、疲れを癒したりして、初めて茶の徳を生かすことができる、ということになる。

市民は、「オレゴン生涯学習村」(平成元年に第三セクターによる株式会社を設立し、アメリカ合衆国オレゴン州ユージン市に農場72haを購入して掛川市民の「国際生涯学習」を実践できるようにしたもの)で、農業後継者の研修、日米農業の比較、農業情報の収集を行う。また、中・高・大学生は、ここでアメリカ研修、英語塾、野外生活体験をする。外国での研修・学習は、かつて明善がしばしば起こる天竜川氾濫を報徳精神で解決する為、私費で水利学校を設立し生徒をフランス等へ留学させ水利技術を学ばせた話を思い起こさせる。

その他、市長は市民に次のようなことを求める。

ア. 省エネルギーの生活哲学、省資源の職業倫理の追究。市長は、「尊徳の教えは、子孫を思って現在を地味にすごし、他人の恩を感じて、これに報い、そしてほどこし、自己を節するというきわめて禁欲的、省資源的なもの」と言う⁴⁴⁾。また、ものの美点、長所を大切にすれば、ケチではなく省エネ・省資源になると言う。

イ. 「私による私の幸せ」の追求と生涯設計。

ウ. 一人一芸一スポーツ、一人一業一ボランティア、一人一役一健康法への参加。

エ. 「余裕の美德を求めて集う」^{つど} 為の「つま恋」活用⁴⁵⁾。

④ 農家・商工業者

市長は農家に対し、報徳運動をバックボーンに据え、農業を営むのは1つの思想運動でもあると認識した専業農家が育つことを求める⁴⁶⁾。

市が提唱する「商工業の安定路線、省エネルギーの生活哲学(報徳)を確立する」に應えるように、何人かの事業者は商売を勉強し、商売のレゾンデートル(存在理由、存在価値)を考えている。実際に、過去には遠州地方で商人による報徳社も結成されている。鷲山恭平(郷土史家・報徳社社長・小笠郡^{おじかた}土方村村長。明治5年～昭和32年)は、遠州に初めて報徳を伝導した安居院庄七(別名義道。寛政元<1789>年～文久3<1863>年)が伝えた商法(「元値商」「報徳商」)を次のように述べる。「……翁(安居院庄七ー引用者注)は世の中の人が高く売れば儲かると云ひ、安く売れば損をすると思ふ、然かし高値の店はお客が減る安く勉強する店はお客が殖へる、譲つて損なく賣つ

て益なしの教訓から割り出して、『合ふ様にしても合はぬ、合はぬ様にしても合ふ』格言様のものを案出して、自分の算盤を強く握っても思つた程金は儲からぬ、お客に算盤を預けてもお得意大事に扱へば店は栄へる、又商法は売つて喜び買って喜ぶ、双方共々喜ぶのが極意である……。」⁴⁷⁾ こうした商人道のエートスを、市長は現在にも通じる「職業倫理」或いは「掛川人の商売魂」とし、掛川という地方の特殊性の中で「大きくなりもしないが、不況でつぶれもしない」商工業の基本として活かそうとしている⁴⁸⁾。

⑤ 青少年

市長は、現代青少年の状況に問題を感じ述べる。「尊徳像は、実学、実働の素晴らしさを持った傑作であります。子供にも徳があります。しかし、現代の家庭には躰の方針がないため、子供の徳を引き出せないでいる……親のできないことを子供に押し付けている場合が多い……。現代はお手本なき社会で、財政をはじめ全般にわたって、再建、再生は自分の頭で考えて歩む生涯学習が大切です。」⁴⁹⁾ 「今の若者の考え方は変わっていて、節約についていえば、本来タクシーを使わず歩くことが節約なのですが、……人の自動車に便乗させてもらって無料なのが節約である、という発想であります。哲学者イヴァンイリッチによりますと、現代の病弊は、①学校化の病弊（なんでも学校オンリーで自立心なし）、②加速化の病弊（早い者勝ち、自分の足で歩かない）、③医療化の病弊（注射してください。云々……、無知で自分から直すことを忘れている）、④幼稚化の病弊（親離れ子離れができない……子供っぽくなっている）であるといえます。……。現代はモラトリアム社会で、過保護、甘えの社会ですので、事故、事件が多発しています。……報徳の目指すところと逆の方、逆の方へ行っていると思います。」⁵⁰⁾ こうした状況の中、彼は「東洋では古来、知育、徳育、体育を三領域として、そのバランスを重視してきた。／第二次世界大戦後、日本では、知育と体育は盛ん……、徳育は、二宮金次郎の銅像とともにすたれ」⁵¹⁾ たが、掛川で生まれた為徳育をいつも意識しその重要性を考える。そして、「徳という言葉は、今も人徳として生きています。徳は誰もが持っています。……その徳を引っぱり出すのが報徳運動（教育）であります（エデュケーションとは引き出すということ）。同時に、感謝の生活（譲る面）であり、天地自然万物森羅万象の徳を引き出すことを若い世代は知らなければなりません。」⁵²⁾ と力説し人々に呼びかける。

では、以下に徳育の推進例を挙げてみよう。

ア. 市長は、「溜池谷田文化」を良質の情報とし、小笠・掛川学校区の社会科教師有志に「溜池」の授業書を編集してもらい、小学校4年生の教材として活用した。彼は「かつて400～500あった溜池は、荒廃した農村の生産力をあ

げる為、報徳がバックボーン・エネルギーとなって造られた」（市長談）と言う。なお、明治期の「遠江国報徳社」の「無利息年賦貸付金明細表」（大報文書）より、実際に「遠江国報徳社」の支社は溜池新築費を盛んに借りて溜池を自発的・積極的に造っていたことがわかる。

- イ。市長は、徳を引き出すことを若い世代が知る為に「報徳訓」を新しく別の言葉で置き換え、生涯学習と報徳とを結びつけ啓発する。「報徳訓」とは次のようなもので、尊徳が一般農民に対し報徳の教説を理解しやすくする為に作成したものである（報徳社の「常会」では必ず全員でこれを合唱している。また、報徳社の機関誌にもしばしば掲載された。）。

「父母根元在天地令命	身体根元在父母生育	子孫相続在夫婦丹精
父母富貴在祖先勤功	吾身富貴在父母積善	子孫富貴在自己勤勞
身命長養在衣食住三	衣食住三在田畠山林	田畠山林在人民勤耕
今年衣食在昨年産業	来年衣食在今年艱難	年々歳々不可忘報徳」

市長は、この「田畠山林」を資源環境と置き換えたり⁵³⁾、飽食、浪費、垂れ流しのような「分度」の徳の喪失のうえでの繁栄に警告を発したりしている⁵⁴⁾。

- ウ。市長は、徳育をそのまま出すと、修身の復活だ、徳目主義だ、説教くさい、古くさい、反動的だ等と言われるので、食育と撫育を考え提唱した（市長談）。すなわち、人間の二大本能は食欲と性欲で死ぬまで持ち続ける生きがいの根源的なもので、人生は、食事に始まって食事に終わり、愛撫に始まって愛撫におわる⁵⁵⁾。したがって、徳育は食事の教育（食育）と愛撫する教育（撫育）で始まるのが適当と考え、食事・愛撫を「限りなくやさしく、限りなく美しく、限りなく心を込めてできる人を育て」⁵⁶⁾るよう尽力する。彼は、食育・撫育は報徳から考えたのではないとするが、前述の「一杯のお茶」の話から食育は報徳と関係する。また、「撫育は林学用語にもあり、植林すること」（市長談）で、彼は「木を植ゆるは徳を植ゆるなり」と認識しているから、彼においては撫育は徳を植え育てる報徳の実践にもなる。

- エ。昭和56年に発足した「掛川市青少年健全育成会」（事務局は掛川市教育委員会社会教育課）は、「徳育の木」を描いた紙を作り平成5年10月に広報で各家庭に配布し家庭に貼ることを呼びかけた。

- オ。市は、報徳による青少年育成（例、良一郎による私塾「^{きほく}翼北学舎」）の設立・運営）の土壌の活用を考えている。例えば、「明治のはじめ多くの傑出した人物を育てた翼北学舎の精神」を受け継ぎ、倉真小学校区で「翼北祭」開催・PTA活動の機関紙『翼北』発行、地域で郷土誌『くらみ』発行をし

ていることを広報に掲載し市民を啓発する⁵⁷⁾。

⑥ 婦 人

市は、婦人に対して、女性の知恵を出す、女性学を学習する、“生涯教育ママ”をめざす、「母体の教育」を充実すること等を図っている。例えば、模擬市議会「女性会議」で、任期1年の27人の会議員が本会議（年1度）と全員協議会（年1度）を行う。研修会・運営委員会は随時行われ、専門委員会では文化・教育、民生環境、市民経済に関することが話し合われる。

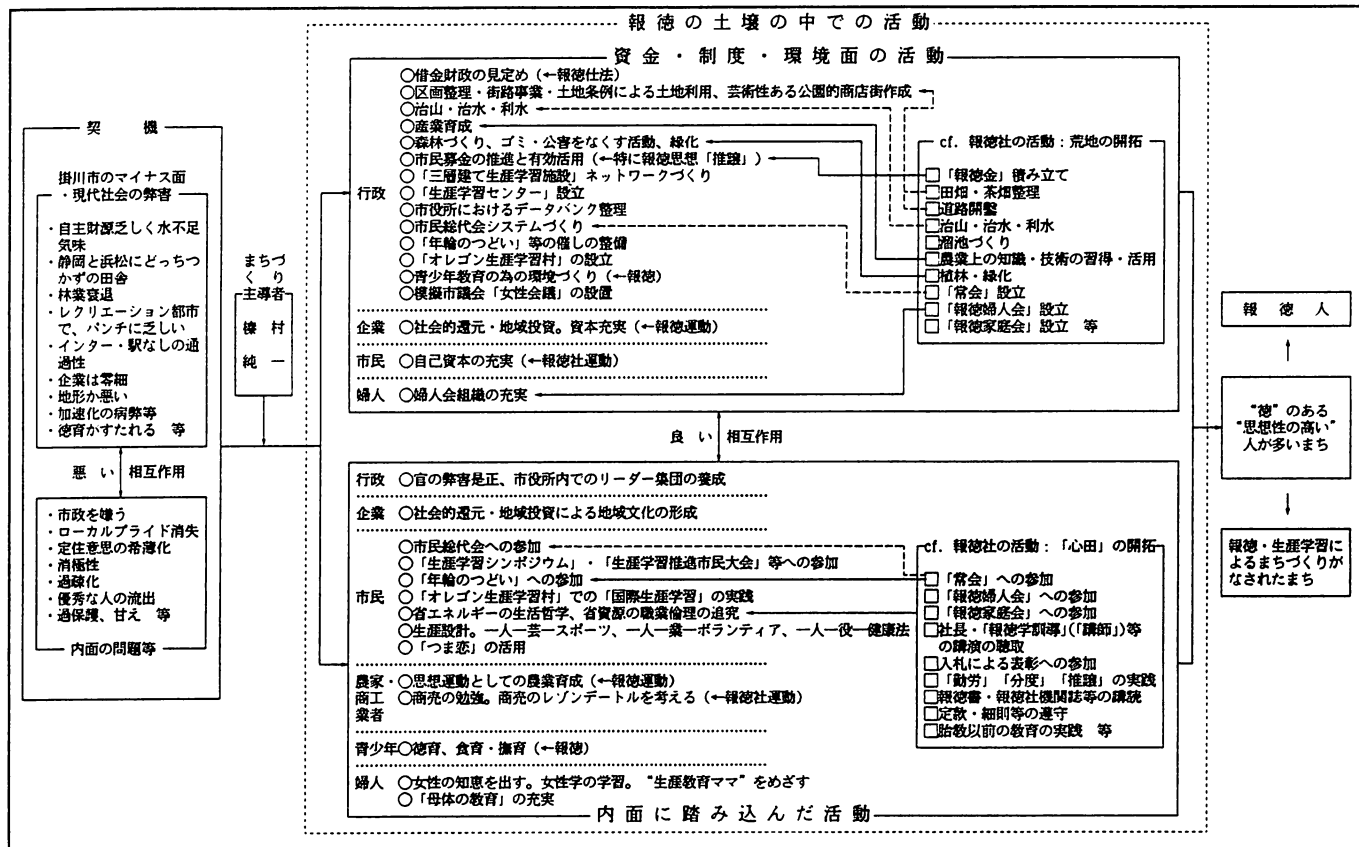
おわりに

以上みてきた生涯学習都市掛川におけるまちづくりと報徳の状況を図示すると図1のようになる。これによると、生涯学習都市掛川は単に都市経営としてまちづくりを推進しているだけでなく、報徳社の活動の土壌を活用しつつ人々の内面にまで踏み込み道徳心の育成も考えた活動も行っている。これは、荒地の開拓と「心田」の開拓とを両立させてまちづくりを進める報徳社の方法論に酷似していることが指摘できる。

市長は、以下の市民の批判等の声も把握している。(1)「上でざわざわ……下は何も動いていない、竹やぶ生涯学習だ」⁵⁸⁾。(2)「二五億円を集めるために掛川学事始という生涯学習運動をやったのではないか」。(3)市の公共事業・行事を「何でもかんでも生涯学習にしすぎる」。(4)「文化ではメシは食えない」。(5)「マイナス情報は減っていない。生涯学習は空念仏に終わっている」。(6)「積極的すぎて市の借金が一六〇億円にもなって、財政が硬直化した」。(7)「評判倒れ、夢物語、アイデア倒れ、いらぬお節介ではないか。市民を迷わすのみ……」。(8)「学歴社会や差別・選別の体系はむしろ激しくなっている」。(9)「『カルチャー講座花ざかりパパママお留守で僕非行』と言われる……区長や役員は市長に引っぱり回されて忙しくなるばかりだ」。(10)「青年団も婦人会も消防団も自治区役もなり手が少なく衰退し……何が生涯学習なのか。」

市長は、こうした批判等を冷静に受け止める。「市民にとって目にみえる即座の結果も必要」と言う一方、「渋さとケチとはちが」い「報徳の文化は渋さの文化であり、後代のために精励し、他人のために貢献する。／掛川に対し、報徳運動がマイナスに働いたか、プラスに働いたかは、これからがきめること」⁵⁹⁾と述べてゆったりと構える。ここには、かつて300年の樹を育てることと300年かけて「人智品行」を改良することを併せて考え報徳社運動に邁進した指導者良一郎と重複する市長の姿がある。

図1 生涯学習都市掛川におけるまちづくりと報徳



（備考）実線の左矢は、報徳、報徳思想、報徳仕法、報徳運動、報徳社運動、報徳社の活動、からの影響があることを表す。点線の左矢は、それらからの影響があると思われることを表す。

〔註〕

- 1) 松原治郎, 鐘ヶ江晴彦著『教育学大全集 9 地域と教育』第一法規, 昭和56年, pp. 171~177。
- 2) 宮崎俊作「現代のユートピアをめざす」, 『月刊 社会教育』No.290, 国土社, 昭和56年, pp. 50~55。
- 3) 『地方財務』No.444, ぎょうせい, 平成3年5月, pp. 19~30。
- 4) ぎょうせい, 平成4年, pp. 329~331。
- 5) 岩波新書294, 岩波書店, 平成5年, pp. 180~182。
- 6) 掛川市史編纂委員会編, 掛川市, 平成4年, pp. 1452~1493。
- 7) 日常出版, 平成5年, pp. 130~137。
- 8) 「心田」の開拓については, 拙稿「近代日本における報徳社の教育活動に関する研究(Ⅲ) - 橋本孫一郎の『双松学舎』の経営を中心に -」, 『金沢大学大学教育開放センター紀要』第10号, 平成2年3月, pp. 107~151, を参照されたい。
- 9) 榛村純一編『いま, なぜ生涯学習か』清文社, 昭和57年, p. 80。
- 10) 榛村純一『生涯学習都市って何やってんの お茶と報徳の町掛川の挑戦』(以下, 『何』と略称) 清文社, 昭和59年, p. 174。
- 11) 同上 p. 227。
- 12) 『広報 かけがわ』(以下, 『広』と略称) 第580号, 昭和57年2月15日, p. 6。
- 13) 榛村純一「陰徳の人 - 良寛と尊徳」, 『致知』1991.9月号, p. 23。
- 14) 昭和52年第6回定例会(昭和52年9月27日)における市長の所信表明演説。『掛川市議会会議録』所収。
- 15) 前掲「陰徳の人 - 良寛と尊徳」p. 21。
- 16) 同上 pp. 21~22。
- 17) 前掲『広』第580号, p. 6。
- 18) 飯島宗一・石井威望・榛村純一編集『生涯学習最前線』ぎょうせい, 昭和62年, p. 24。
- 19) 前掲『広』第580号, p. 5。
- 20) 21) 前掲『生涯学習最前線』p. 32。
- 22) 榛村純一「木を植ゆるは徳を植ゆるなり」, 『日本報徳運動雑誌集成』〈全47巻, 別巻1〉のパンフレット, 緑蔭書房, 平成6年。
- 23) なお, 市長は条例以前より「報徳精神による土地利用線びきをきちんとした思想性の高い農村都市の方向」(『広』第529・第530合併号, 昭和55年1月1日, p. 6。)を打ち出していた。

154 研究ノート

- 24) 『広』第511号, 昭和54年4月1日, p. 8; 掛川市生涯学習部良質地域課・教育委員会社会教育課『生涯学習都市をめざして - 掛川市の生涯学習運動 -』平成7年1月。
- 25) 『広』第539号, 昭和55年6月1日, p. 5。
- 26) 前掲『広』第511号, p. 8。
- 27) 榛村純一「先祖の大杉と話す」, 『朝日新聞』昭和63年7月9日付。
- 28) 榛村純一「尊徳の教えと六つの貯蓄」, 『エコノミスト』92.11, 毎日新聞社, p. 90。
- 29) 『広』第515号, 昭和54年6月1日, p. 6。淡山とは, 岡田良一郎のこと。
- 30) 『広』第507号, 昭和54年2月1日, p. 5。
- 31) 32) 前掲「尊徳の教えと六つの貯蓄」p. 90。
- 33) 『広』第495号, 昭和53年8月1日, p. 6。
- 34) 35) 前掲『生涯学習都市をめざして - 掛川市の生涯学習運動 -』
- 36) 榛村純一『掛川市生涯学習運動の特色と課題 十八項目のテーマとプロジェクトはいかにすすんだか』市民総代会システム十周年記念, 昭和63年4月, 等。
- 37) 前掲『日本報徳運動雑誌集成』のパンフレット。
- 38) 39) 前掲「先祖の大杉と話す」。
- 40) 伊藤滋, 木原啓吉, 榛村純一編『地方の時代への模索』清文社, 昭和55年, p. 20。
- 41) 前掲『何』p. 301。
- 42) 43) 榛村純一掛川市長「地域づくりと生涯学習」, 『読売新聞』日刊, 平成4年1月9日付。
- 44) 前掲『広』第495号, p. 6。
- 45) 『広』第518号, 昭和54年7月15日, p. 6。
- 46) 前掲『いま, なぜ生涯学習か』p. 85。
- 47) 鷲山恭平『安居院義道』大日本報徳社, 昭和28年12月, p. 15。傍線は引用者。
- 48) 前掲『地方の時代への模索』p. 45, 等。
- 49) 前掲『何』p. 300。
- 50) 同上 pp. 299~300。
- 51) 前掲『日本報徳運動雑誌集成』のパンフレット。
- 52) 53) 前掲『何』p. 299。
- 54) 前掲「陰徳の人 - 良寛と尊徳」p. 22。
- 55) 56) 前掲「地域づくりと生涯学習」
- 57) 前掲『広』第529・第530合併号, p. 9。
- 58) 以下の批判等は, 前掲『生涯学習最前線』p. 28・36, pp. 42~43, より。
- 59) 『広』第489号, 昭和53年5月1日, p. 6。